

ワクチンで感染 中高年のポリオ患者

一九五〇年代から六〇年代にかけて大流行したポリオ（小児まひ）。ワクチン導入で根絶したとされるが、そのワクチンが原因で感染し、今も病気に苦しむ患者は少なくない。ワクチンによる患者は今後、中高年を迎える人が多く、まひや筋力が低下する「ポストポリオ症候群（PPS）」に襲われる可能性がある。東海地方の患者団体は、専門医療機関での適切な受診を呼び掛けている。（佐橋大）

呼び掛けているのは、東海や北陸地方の患者らでつくる「ポリオ友の会東海」。その中心にいるのは、役員を務める竹中幸彦さん（五〇〃名古屋北区区）。生後半年の一九六四年に飲んだワクチンでポリオに感染し発症。右脚に重いまひが残り、五十歳ごろから左脚も、筋力の衰えを感じるようになった。「左脚の力が落ちてから、つえをつく両腕にかかる負担が増えた」と話す。

ポリオは、五〇年代に流行し、六〇年には患者数が五千人を超える大流行が発生。六一年から、毒性を弱めた生きたウイルスでつくる「生ワクチン」が導入され、患者数は激減した。一

方で、生ワクチンはごくまれだがポリオを引き起こすため、二〇一二年に不活化ワクチンに切り替わるまで、生ワクチンによる感染が続いた。野生のウイルスによる感染は一九八一年以降、出ていない。

予防接種による健康被害の救済制度が始まった七六年以降、生ワクチンによるまひが健康被害として認められ、障害年金や障害児養育年金を支給されたのは百十九人。年三十四人の割合だが、竹中さんは「患者はもっといる可能性がある」と推測する。

友の会東海には、症状から生ワクチンによるまひの可能性が濃厚と医師もみているのに、健康被害と認め

筋力衰える PPS 発症も

ポストポリオ症候群

られていない会員もいるからだ。愛知県岡崎市の山本裕規さん（三〇）はその一人。山本さんは、物心ついたころから右脚にまひがあり、親からは「重い病気の後遺症」としか聞かされてこなかった。

友の会東海顧問で小児科医の横井敦子さん（六〇）は「名古屋瑞穂区」は「導入当初、生ワクチンの危険性を強く注意喚起された記憶がない。関連性に気付かなかったケースもあるのでは」と指摘する。

ポリオにかかった場合、最も注意しなければならぬのは PPS。発症の仕組みは完全には分かっていないが、ウイルスによって損なわれた神経細胞を補うため、残った神経細胞に過度な負担が集中、その結果、



ポリオ患者らが病気に必要な情報を共有することの必要性を訴える竹中さん（手前）＝名古屋北区の市総合社会福祉会館で

周知不徹底「専門機関受診を」

老化が早まり、手足の筋力低下や痛みが生じると考えられている。竹中さんの症状も PPS だ。

PPS には軽度の運動が効果的とされるが、医師の間でも十分に知られていないため誤診されることが多く、負荷の重すぎるトレーニングで症状が悪化するケースもある。

ポリオ（小児まひ） 乳幼児期に感染することが多かったポリオウイルスによる感染症。感染しても9割以上は無症状だが、ごく一部では、ウイルスが脊髄に入り込み、手足に力が入らなまひが残る。症状は成長に伴い和らぐこともある。出生前後に脳に障害がまひ」と誤解されることもあるが、ポリオとは症状は異なる。

友の会東海は、PPSの発症や悪化の防止に力を入れる。十年前から藤田保健衛生大病院（愛知県豊明市）と共同で検診会を実施。検診の結果は、一人一人に合ったリハビリや生活指導、体の負担を軽くする装置の導入などに生かされている。

「患者は病気に必要な情報をもっと知る必要がある。友の会東海には専門医療機関とのパイプもあり、PPS予防のノウハウもある。多くの患者にこのノウハウを生かしてもらいたい」と竹中さん。一方で「ポリオ患者は高齢者が多いが、若い人でも患者はいる。PPSの兆候が出た際、適切な医療が受けられるよう、医療従事者にもPPSについて深く知ってもらいたい」と注文を付ける。

友の会東海は、ホームページ（HP）で、患者らがポリオやその治療に関する情報を共有する必要性を強調。若い患者らに会への参加を呼び掛けている。HPは「ポリオ友の会東海」で検索。ポリオ友の会東海の連絡先は、向山昌邦代表「電話052(932)1854」。

つなごう 医療 370

中部の最前線